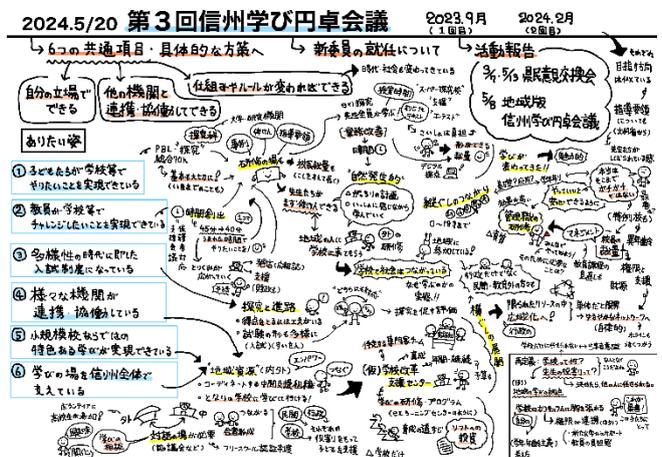


第3回信州学び円卓会議の概要

■概要

実施日程	令和6年5月20日(月) 13:00~15:00
場所	信濃教育会館 2階 講堂
出席者	・円卓会議委員13名(内オンライン4名) ※別紙名簿のとおり ・阿部知事(オブザーバー)、武田教育長(オブザーバー)
会の目的	これまでの信州学び円卓会議や県民意見交換会で出された意見の共通項目を踏まえ、具体的な方策に関する意見交換を実施

■当日の様子



■主な意見

- ・今までやってきた基礎的・基本的なところも大事にし、バランスを取りながら探究的な学びを実践することが大事。
- ・教材研究をする時間が取りづらい。学習指導の内容を工夫して、時間を創出することが大事。
- ・県外だけではなく、県内でも先進的な取組をしている学校があるため、取組成果を共有し、そこから学んでいく仕組みをつくっていく。
- ・やりたい学校にはやりたいたくだけ教育活動を保障してあげられるような様々な支援が、県・市町村教育委員会を含め、生まれてくると良い。
- ・児童生徒が主体的・能動的に学ぶときに、学んでいることを学習指導要領と関連付けることが必要になるが、先生方がそうした経験ができる研修を受けることが必要。
- ・学校の推進役である校長がある程度長期的に学校を見て、予算や裁量権があることが必要。
- ・先生方もまずやってみること。子どもに主体的にということ望むのであれば、教職員をそうした姿勢を出し、その姿勢を認めて背中を押していくことが大事。
- ・探究の充実と生徒が目指す進路実現、これをどうやってスムーズに結び付けていくかというところを学校において重要なポイントとして取り組んでいる。

- ・学習指導要領ではなく教科書や教師用指導書に事細かに記載があり、ここに書いてあることを全部教えてあげないと、子どもたちの未来の選択肢を削ぐみたいな強迫観念になっているのでは。
- ・学習指導要領が改訂されてどれだけ変わっても、先生方の縛られている感は変わらないかもしれない。
- ・子どもたちが一番モチベーションを強く感じるのは、自分たちがやっていることが実社会に関係しているということを実感できるとき。
- ・なぜこれを学ぶのか、それが世の中でどのように使われているのか、学んでできたことが誰にどのように良い影響を与えるのか実感できることが、大きな自信や学びたい欲求、モチベーションに繋がっていくのでは。
- ・中山間地域において、ある程度規模が似通った学校あるいは地域の中の学校同士で情報交換や連携をし、例えば異なる学校間の若手・ベテランの先生が連携して色々な学びができるなど、そのような形ができると良い。
- ・学びを考えたときに学校内と学校外というのがこれからの時代は特に求められるのかなと思う。学校内と学校外での学びが本当に同じ目線になれているのかなとよく感じる。
- ・原因は、対話の場がとても少ないこと。学校の先生たちと学校外のフリースクールや民間の支援団体が対話をする場がまだまだ少ない。
- ・学校に行かない子どもたちの気持ちや様々な方の思いと一緒に対応できる場所が市町村単位ではとても少なく、当事者の子どもたちや保護者の方も一緒に入ってどんな学び方で学んでいくのか合意形成を取れる場所をつくっていくことが大事。
- ・学校のチャレンジや教員・支援人材の学びに伴走支援したり、学校支援の専門家を育成したりする専門組織をつくったらどうか。
- ・小規模校がたくさんあることを強みにできるのではないか。例えば、複式学級を廃止して異年齢・少人数を活かした学習者中心の学びにチャレンジしていく、特例校制度の積極的な活用など、小さい学校だからこそ様々な変革の可能性があるというように強みに置き換えていく。
- ・探究的なクリエイティブな学びをどんどん評価してほしい。忙しいとか、学習指導要領の制約要因の話もあったが、各学校の管理職の校長先生でやろうと思ったらやれる部分は結構大きいと思う。
- ・教員研修など色々やってきたが、最も効率が良いのはそうした力のある校長先生自身が旗を振る、そのような管理職が必要。
- ・県行政で横串の支援。例えば、農業×STEAMで農業の部分と教育の部分をやすることで、今までの教育ではできなかった色々な取組や予算規模、連携が生じる。行政の横串は古くからある課題で簡単ではないことは理解しているが、できたら面白い。
- ・各自治体や各学校が、限られた人材や予算、資源、ノウハウ・経験をいかに共有するか。アプローチの視点を行政側に持って、教育委員会の広域化を提案したい。
- ・学校単位や自治体単位の努力をエンパワーしていくことが教育行政の一番大きな役目ではないかと思う。
- ・学校現場の人材的にも限りがある中で、いかにネットワークしていくかという視点がこれからますます重要になるのではないか。

- ・特色のある学校実践、教育実践を推進するためには、学校現場の自由自治の保障、明確な権限をできるだけ現場に近いところにおろしていく、それを支える確かな財源が必要。
- ・権限や財源等を広域教育委員会にある程度おろせば、その地域で責任を持って地域全体の質を上げるような取組もしやすいのではないか。
- ・部活動の地域移行も、実態として自治体を超えて子どもたちは行き来しているので、安心安全を担保する上でも、広域化はもう避けては通れない課題ではないか。
- ・時代の変化にもう少し学校運営が追いついていかななくてはいけないということで、学校長のマネジメントは非常に重要になってくる。
- ・教育課程の編成がもっと自由にできるんだということを今後広域化しつつある中でやっていかないと、先生方が授業や学校はこうあるべきだと言っているところから抜け出せないのではないか。
- ・学校だけが学びの場ではない、学校だけに任せておけないと変わってきている中で、学校ではないところに何を任せてどんなことをしていくのかということもまだ明確ではないので、学校はこれではできませんとは言えない。
- ・管理職が教育課程の中で自由に、大胆に学校運営をしている要因を、個人的な資質の問題にしてしまうのは少し違うのではないか。
- ・教育に関わる色々なものを再定義しなければいけないのでは。例えば、働き方改革する前に学校の先生に何を期待しているのかをしっかりと決めないと、働きにくさは改善されていかない。
- ・関係性のあり方、色々な機関と学校との関係のあり方、学校内と学校外との関係性のあり方など、見直していかないと本当の意味で子どもたちにとって最善の学びにはつながっていかないのでは。

■座長のまとめ

- ・本日出てきた具体的な論点としては、以下の6点ほど。
 - ①「探究的な学び」の推進の加速。方法としての遠隔教育の活用や STEAM 教育の活用など様々なアプローチがあってしかるべきで、その取組を後押ししていけるかが問われているのではないか。
 - ②新たな学びのスタイルや内容を推進していくためには、現在の学校現場が抱えている課題、すなわち、多忙感や負担感に対して、働き方改革を断行していくための支援が必要である。
 - ③子どもにとっての学習環境の一丁目一番地は、教職員の存在。教職員の配置や処遇などについて、全県レベルで再検討する必要があるのではないか。
 - ④長野県の中山間地における学びを充実させていくためにも、新たなチャレンジを後押ししていく方法を考えていく必要がある。
 - ⑤教師の学びのあり方の再構築と関わって、オーダーメイド型の教師の学びを多様な機関が連携をしながら構築していく必要がある。
 - ⑥様々な教育関係機関・主体との関係性を再構築していく必要がある。
- ・いただいたご意見を信州学び円卓会議の案としてお示しし、県民の皆様のご理解を得ていくプロセスに移行していこうと考えているところ。

信州学び円卓会議 構成員名簿

(50音順)

職 名	氏 名	備 考
信州大学教職支援センター准教授	荒井英治郎	座 長
軽井沢風越学園校長	岩瀬直樹	オンライン 参加
松本大学教育学部教職支援室専門員	浦野憲一郎	
根羽村長	大久保憲一	
(公社)信濃教育会会長	大日方貞一	
(学)白馬インターナショナルスクール理事長	草本朋子	
長野県市町村教育委員会連絡協議会会長 長野市教育長職務代理者	近藤 守	
NPO法人 Hug 代表	篠田阿依	オンライン 参加
山ノ内町教育長	竹内延彦	
上田市立第五中学校校長	畠山正幸	
須坂市長	三木正夫	欠席
松本市立波田小学校校長	三輪千子	オンライン 参加
信州大学教育学部学部長	村松浩幸	オンライン 参加
長野県野沢北高等学校校長	柳沢 敬	オンライン 参加